



第16回  
春日井市交響楽団定期演奏会

Kasugai City Philharmonic Orchestra

2007年7月8日(日)

15時 開演  
春日井市民会館

## ごあいさつ



### ごあいさつ

春日井市交響楽団  
名誉会長

春日井市長  
伊藤 太

七夕飾りが涼風に揺れ、風鈴の音が清々しい季節のなか、第16回春日井市交響楽団定期演奏会が盛大に開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

貴団におかれましては、学生と社会人により結成されたメンバーが日々研鑽を積み、練習に励んだ成果を発表する場として、また、市民の皆様がクラシック音楽をより身近に親しんでいただくための場として、本日の定期演奏会を開催していただいておりますことは、市民文化の創造をまちづくりの大きな柱としております本市にとりまして誠に心強く、深く敬意と感謝を表する次第でございます。

濱津清仁氏の指揮にのせて、国際的に活躍されているピアノ奏者、ヴァターリ・ピサレンコ氏のピアノと管弦楽が織りなすハーモニーは、きっと観客の皆様を魅了し、素晴らしい演奏会になるものと大いに期待しております。

最後に、演奏会の成功とご出演の皆様をはじめ関係各位のより一層のご活躍を心から祈念申し上げます、ごあいさつとさせていただきます。



### ごあいさつ

春日井市交響楽団  
会長

中部大学 学監  
三浦昌夫

春日井市交響楽団の第16回定期演奏会によるごあいさつをいただきました。いつも、音楽都市春日井の市民のみなさまに、12月の「春日井市民第九演奏会」となると、7月の定期演奏会で「名曲の名演奏」をお聴かせするのが、私たちの使命であり喜びです。

今回は特に、チャイコフスキーの名曲を二つ演奏いたします。どれも大曲で難曲ですが、半年に及ぶ猛練習の成果のほどをお聴き下さい。ソリストに若いウクライナのピアニスト、ヴァターリ・ピサレンコさんをお迎えしました。私たちはまた、こうした優れた国際的な演奏家を招いて、「春日井の世界に開かれた音楽の窓」としての役割も十分に果たします。

ウィーンで学んだ指揮者の濱津清仁さんの優雅で感性に富んだ音楽作りと春日井市交響楽団のメンバーの熱演で、名曲の素晴らしさを十二分にお楽しみいただければ幸いです。

では、最後までごゆっくりお聴き下さい。

## プログラム Program

モーツァルト (1756~1791) 作曲  
W.A.Mozart

「後宮からの逃走」序曲 KV384

Ouverture zur Oper  
Die Entführung aus dem Serail KV384

チャイコフスキー (1840~1893) 作曲  
P.I. Tchaikowsky

ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23  
Konzert für Klavier und Orchester Nr.1 b-moll Op. 23

第1楽章 Allegro non troppo e molto maestoso : いきいきと、しかしはなはだしくなく、そして堂々と  
第2楽章 Andantino semplice : アンダンテよりやや速く、単純に  
第3楽章 Allegro con fuoco : いきいきと、火のように

《休憩》 Intermission

チャイコフスキー (1840~1893) 作曲  
P.I. Tchaikowsky

交響曲 第4番 変ロ短調 作品36  
Symphonie Nr.4 f-moll Op.36

第1楽章 Andante Sostenuto, In movimento di Valse : ワルツの動きで、少し遅めに歩くように  
第2楽章 Andantino in modo di canzona : やや速めに歩くように、うたうように  
第3楽章 Allegro : いきいきと、陽気に  
第4楽章 Allegro con Fuoco : いきいきと、火のように

ピアノ独奏 ヴァターリ・ピサレンコ

指揮 濱津 清仁

演奏 春日井市交響楽団

## プロフィール



ピアノ独奏  
ヴィターリ・ピサレンコ

1987年7月24日キエフ生まれ。19歳。5歳のときからピアノを始める。6歳で初ステージを踏んで、これまでに東欧圏の各都市(ウクライナ・ロシア・チェコ・ルーマニアなど)のコンクールで多くの賞を得ている。現在、モスクワのチャイコフスキー音楽院でスレサレフ氏に、また、大学院コースはロッテルダム音楽院でアキレス・デッレ・ヴィニユに学んでいる。この間、2005年にマケドニアのピアノコンクールで優勝。2006年にラヴェンナのピアノコンクールで第2位。イタリアのトラネ国際ピアノコンクールで優勝。ザルツブルクのモーツァルトフェスティバルで入賞。2006年には、ユーロ・アーツの「若い芸術家たち」に選ばれて国際的な活動を始めている。現在、日本(中部大学キャンパス・コンサートと春日井市交響楽団定期演奏会)、イタリア、オーストラリア(シドニー)、韓国、ドイツ、トルコから招待されている。



指揮  
濱津清仁

2004年ウィーン楽友協会黄金ホールにて、オーストリア・ウィーン放送交響楽団を指揮し、鮮烈な楽壇デビューを飾った濱津は、1975年福島生まれの将来を期待されている逸材として注目を集めている新進気鋭の指揮者。幼少よりピアノ・ヴァイオリンを学び東京音楽大学ピアノ科に入学するも、後に指揮科に転科し1997年同大学を卒業。在学中より、オペラ・声楽付き作品への才能を示し、「ダイドーとエネアス」「クリスマス・オラトリオ」等を指揮する。その後渡欧し、ウィーン国立音楽大学指揮科に入学する。在学中より頭角を現し、主任教授レオポルド・ハーガーの許、管弦楽・オペラなど広範に亘るレパートリーを吸収し、ウィーン国立音楽大学主催公演でウィーン・プロ・アルテ管を指揮し(ウェーベルン「管弦楽のための5つの小品」など)好評を得た。学内だけに留まらず、ルーマニア国立オラデア・フィルの定期演奏会、ハンガリー・セゲド管、イタリア・ボルツァーノ・ハイデン管を指揮するなど活発な活動を展開し、特に自ら主宰したウィーンにおける"SAKURA"室内管弦楽団との活動も特筆される。ヨーロッパでの正統的な指揮教育を受けた濱津が紡ぎ出す音楽は、奇を衒わない解釈と清冽な響きに満たされ聴衆からの熱い支持を受けている。最近では国内での活動にも取り組み、札幌交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、セントラル愛知交響楽団、兵庫芸術文化センター管弦楽団などに登場した。クラシックの枠に捉われず、ウェストサイドストーリーなどの多くのミュージカルも指揮し、今後多くの分野でますます期待されている。

東京音楽大学指揮科、ウィーン国立音楽大学院指揮科をそれぞれ卒業。これまでに、レオポルド・ハーガー、エルヴィン・アツツェル、湯浅勇治、小澤征爾、秋山和慶、汐澤安彦、広上淳一に師事。

## オーケストラ 春日井市交響楽団 Kasugai City Philharmonic Orchestra

市民オーケである春日井市交響楽団は、ベートーヴェンの「第九交響曲」の演奏会を春日井市で開きたいという市民の思いから生まれました。それを受けて、「市民が演奏し・市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」として、市内の音楽愛好家を中心に、1990年(平成2年)11月に創立されました。愛称「カポ」(KAPO)は英字名称「KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA」の頭文字をとったもので、イタリア語の「カポ」(capo 頭・先頭に立つ者)の思いもあります。毎年、7月の定期演奏会と12月の「春日井市民第九演奏会」を中心に、数多くのオーケストラ活動を行っています。団員は、会社員・公務員・教員・医師・主婦・学生・自営業者などからなる60名。私たちにとって最大の喜びは、一人でも多くみなさまに演奏会においでいただき、音楽を聴く喜びとともにクラシック音楽が好きになっていただくことです。そのために、「春日井で名曲の名演奏を」と心がけています。また、「春日井の開かれた音楽の窓」となって国の内外の最高の音楽家との共演にも努めています。これからも、さらには、市民のみなさまに親しまれ、愛されるカポとして、市民音楽活動をつづけて参ります。温かいご支援をお願いいたします。

## 曲目解説

春日井市交響楽団音楽監督 都築正道(中部大学教授)

### 歌劇《後宮からの逃走》

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト  
(1756-1791) 作曲

モーツァルトがドイツ語で書いた「歌芝居」(Singspiel)です。25歳の1781年の8月、ウィーンの宮廷からオペラの新作の依頼がありました。父親の反対を押し切ってウィーンで独立を志したモーツァルトにとって、待ちに待ったチャンス到来です。どんなに嬉しかったことでしょうか。ありったけの技術と才能を駆使して、当時としては最大級の新しいオペラを書きました。これは喜劇の「オペラ・ブッフア」ですが、すでにイタリアで《ポントの王ミトリダテ》を書き、ミュンヘンでは《イドメネオ》などのオペラ・セリアの大傑作を書いているので、どのアリアも堂々として気品にあふれ、いかにも自信満々の新進作曲の新作です。物語もトルコのハーレムが舞台ですが、愛と寛容を歌ったとても感動的なものです。すでに、隣国トルコからの直接の脅威は薄らぎ、軍楽隊やコーヒーや音楽や衣装や香料や科学など、当時、大変なトルコ・ブームであったとはいえ、異教徒に対する尊敬と理解があるのも、このオペラを開放的で楽しいものにしていきます。ただ、大成功はしたものの、例によって、「音が多すぎる」といったヨセフ2世の言葉に代表されるように、モーツァルトの斬新な時代感覚と宮廷の固陋で時代遅れな保守主義が合わず、最初のオペラからすでに、モーツァルトの音楽は18世紀の人びとの理解と判断を越えたものでした。とはいうものの、私たちがこの彼の初期の作品を十分楽しめるのは、200年後のいま時代が、やっとモーツァルトに追いついたからでしょう。

イタリアオペラの「序曲」(シンフォニア)の基本通りに、「急-緩-急」の三部形式になっています。内容はトルコ風の音楽で、鉦(シンバルとトライアングル)や太鼓が鳴り響きます。中間部のアンダンテではベルモンテのアリアの主題が用いられるなど、新しい試みも聴かれます。「序曲については、14小節しかお送りしていません。これはまったく短くて、強弱が絶えず入れ替わるのですが、フォルテのときはいつもトルコ音楽が入ってきます。そしてつぎつぎに転調していきます。一晩中眠れなかった人でも、これでは眠るわけにはいかないとします」(モーツァルトの父への手紙:1781年9月26日)。

### チャイコフスキーと彼の音楽



1840年5月7日にロシアのウラル地方の裕福な中流家庭に生まれました。すべてにわたって極めて繊細な感性を持っていて、「瀬戸物のような子ども」と家庭教師はいいました。これは最後まで、彼の人生を決定づける原因になります。6歳でフランス語とドイツ語を話し、7歳でフランス語の詩を書き、ピアノを習い始めました。家族は、1850年にペテルブルクへ移りました。1859年に法律学校を卒業して法務省に入り一等書記官になりました。1862年にペテルブルク音楽院が開設されると法務省を退職して音楽院の学生になりました。22歳です。音楽院の校長アントン・ルビンシュタインがチャイコフスキーの才能を認めて彼に作曲はもちろん指揮まで教えました。ルビンシュタインは、弟のニコライがモスクワ音楽院を立ち上げたのでその和声学の教授にチャイコフスキーを推薦しました。彼は、このモスクワ音楽院の教授時代に初期の交響曲3曲をはじめ、バレエ曲「ロミオとジュリエット」や「ピアノ協奏曲第1番」など多くの作品を書きました。1878年に音楽院を辞めて、田舎に別荘を買ってそこで暮らしました。彼の音楽家としての人気が高まるにつれて、演奏旅行の機会も増えました。1891年には、ニューヨークのミュージック・ホール(のちにカーネギーホールと名前を変えます)の完成記念演奏会に招待されました。1893年11月6日に亡くなります。最後の交響曲、「交響曲第6番悲愴」指揮してから8日後のことでしたので自殺説が流れました。いまでは、この説が確かなものになってきています。

チャイコフスキーは、彼が「ジャコパンの」というロシア5人組に代表される、素人っぽく、貧弱で、粗野で、感傷的で、夜郎自大的なロシア土俗の音楽が嫌いでした。ヨーロッパ的な、華麗で、繊細で、古典的で、甘美で、刹那的で、感覚的で、正統的な形式をもつ音楽を好みました。5人組とチャイコフスキーは、最後まで理解し合うことはありませんでした。しかし、「ロシア音楽の民族性」をヨーロッパに紹介したのもチャイコフスキーでした。ヨーロッパは、彼の音楽をロシア音楽として受け入れたのです。ここに歴史と芸術の皮肉があります。

同じロシア人の作曲家ストラヴィンスキーは言います。「チャイコフスキーの音楽は、だれの目にもロシア的とは映らないが、モスクワ的な具象性を標榜するお手軽なレッテルを貼られている作品よりも、はるかに深くロシア的である。彼の音楽は、プーシキンの詩やグリンカの歌曲とまったく同程度にロシア的である。『ロシア農民の魂』を作品の中で特別に掘り起こすことをせずとも、チャイコフスキーは無意識下にわが民族の真に国民的な源泉を掘り当てている」。

メック夫人に宛てた手紙の中でチャイコフスキーは言います。「私の作品の中のロシア的要素につきましても、なんらかの民族的旋律を導入するつもりで作曲に着手することは希にはない、申せましょう。時には、『私たちの交響曲』[交響曲第4番]の最終楽章のように、自然発生的に民謡が姿を見せます。私の作品の中の民族的要素について申しますなら、私の旋律と和声の一部における民謡との近似性は、私が幼児を地方で過ごし、幼年期にロシア民族音楽の個性的な美しさに、とっぴりと浸っていたためでしょう。多様な形で発現される民族的要素を私は、心底から気に入っています。一言で言うなら、私は文字通り掛け値なしのロシア人だと言うことです」。